

つながる

Tsu-na-ga-ru

4月号 2025
April No.21



SPECIAL REPORT

リンクト
LINKED
plus+
病院を
知ろう

医師主導からチーム医療へ 手術室の改革が始動した。

手術センター特集

CONTENTS

- 1 治療を学ぼう
- 2 チーム医療を知ろう
- 3 HOSPITAL NEWS

院長メッセージ

当院では連日、多様な診療科において数多くの手術を行っています。手術では安全第一に、最大限の治療効果をあげるために、スタッフたちが全力を尽くしています。今回の特集は、その手術に焦点をあて、手術センターの役割や多職種のメンバーで進めている手術室の運営改革についてご紹介します。ぜひご一読ください。

SPECIAL REPORT

医師主導からチーム医療へ 手術室の改革が始動した。

手術センター特集

多職種によるチーム医療の力を発揮し、
手術室の運営管理を強化していく。

CHAPTER 01 手術の安全性を高める 厳しいチェック体制。

岡崎市民病院には手術室13室、ハイブリッド手術室(手術台と血管造影装置を組み合わせた手術室)1室があり、連日、多様な症例の手術が行われている。さらに、2020年からロボット支援手術も導入され、医療の高度化が進められてきた。こうした手術室の運営管理を強化するために設立されたのが、手術センターである。センター長を担う長井辰哉医師(副院長を兼任)に、そもそも手術とは何か、ということから話を聞いた。「そもそも手術は人の体を傷つける行為です。それが許されるのはメリットが大きいからですよ。ですから手術はできる限り体への負担の少ない低侵襲手術が理想です。ただし、低侵襲手術は傷の小ささを指すだけでなく、施術時間が短いことも重要な条件です。手術の時間がかかればそれだけ合併症などのリスクも高くなるからです。このように傷の大きさ、時間、患者さんの状態などをコントロールすることが、適切な手術を行う上で大前提になります。私たちは常に全体を見つめて、適切な手術を判断しなくてはなりません」。そうした基本原則を前提にして、長井が2020年に立ち上げたのは「高難度新規医療技術評価部会」だ。これはどんな組織だろうか。「手術に新しい技術を取り入れようとするとき、その技術が妥当かどうかを客観的に評価する委員会です。まず初めに、各診療科から新しい手技について申請してもらい、当院でやるべき技術かどうか、安全に行える体制があるかどうか精査します。技術の導入を認めた後も、さらに10例、20例と症例を継続してモニタリングし、問題はないか、改善点はないか、検証していきます」。同委員会にはこれまでに十数種の手技の申請が寄せられ、一つひとつ丹念に評価され、導入に繋がってきたという。「医療の高度化には当然、チャレンジが必要ですが、やみくもに挑戦するだけでは患者さんの安全性を担保できません。第三者の目で厳しくチェックすることで、手術の質の向上を促すことができます。また、こうした委員会があることは、チャレンジする側にとって安心感にも繋がっているようです」と長井は話す。

COLUMN

●手術センターでは月に1回(管理会議)を開催し、手術室に関するさまざまなデータを分析して問題点を抽出し、業務改善や組織の改革に繋がっている。

●会議に集まるのは、麻酔科の医師、外科系の医師、看護師、臨床工学技士、薬剤師、事務職など多様な顔ぶれだ。多職種がそれぞれの専門的な視点で意見を述べ合うことにより、手術室への人員配置、環境整備などを見直し、着実に業務の効率化、適正化を進めている。



多職種のチームで支える 手術から生活復帰まで。

手術と聞くと、手術室で高度な治療を受ける濃密な時間を想像する。しかし「手術とは必ずしも手術室の行為だけを指すものではない」と長井はいう。「最近では、外来で手術を決めたときから始まり、自宅へ帰って生活を取り戻すまでが手術だと言われています。とくに近年は高齢患者さんが多く、主疾患のほかにもいろいろな問題を抱える人が増えています。そういう方に対し、手術前に看護師、管理栄養士、理学療法士などがアプローチして適切な体調管理を支援していく。手術後もすぐに栄養療法やリハビリテーションを始め、生活復帰をめざしていく。こういった多職種の取り組みが非常に重要になってきました。当院でもそうした多職種による周術期チームの本格的な取り組みに着手したところですよ」（長井）。

もあつた。今ももちろんそうした側面もあるが、それよりもチーム医療へとシフトしてきたのだろうか。「そう思います。昔は医師に誰も意見を言うことはできない風潮がありました。それが間違いですよ。また、今はロボット支援下手術などにより、誰でもトレーニングを積めば標準的な手術ができるようになりました。そういう時代の変化に合わせて、私たちの手術に対する意識も変革していかなければなりません」（長井）。最後に、今後の手術センターの目標を聞いた。「地域の皆さんはまず病気になるのと近くの病院にかかると思っています。でも、手術を受けるとなると、遠い病院に行くケースも多い。それだけ、患者さんにとって手術は命懸けの闘いなんです。だからこそ、当院で大学病院に匹敵するレベルの手術を行うことで地域の方に信頼していただく。さらに、遠方の方からも当院で手術を受けたいと思ってくれたい。そんなふうにご多くの皆さんに選ばれる病院になることが目標です」と長井は力強く語った。

BACKSTAGE 医師単独で決めるのではなく 本当に必要な手術の適用へ。

- 最新医療の恩恵を患者にもたらすのは、医師の情熱や挑戦によるところが大きい。それは現在も変わらないし、一步先の医療をめざすことは、医療人の重要なミッションでもある。
- しかし、それを医師の自由裁量に任せていたのでは、何か問題が起きるリスクも大きい。第三者の目で、あるいは多職種の目で厳しくチェックして、本当に必要な手術適用を考えていく。岡崎市民病院はその重要性を認識し、果敢に挑戦している。



治療を学ぼう

今回のテーマ

術後疼痛管理

術後疼痛管理とは？

手術後の痛みや不快症状を適切に管理し、患者さんの回復を多職種でサポートします。

■ 手術後の痛みを抑え、 ■ 快適な回復へ。

手術後の痛みは、多くの患者さんが直面する課題です。当院では、手術後の痛みを適切に管理するため、2025年1月に「術後疼痛管理チーム」を発足しました。

このチームは麻酔科医・手術室看護師・薬剤師で構成され、週に2回、手術後の患者さんを回診し、痛みの程度をスコア化して最適な治療を行います。適切な鎮痛管理により、痛みの軽減だけでなく、吐き気や嘔吐のコントロールも可能になります。

また、痛みを抑えることで早期離床が促進され、回復がスムーズになります。私たちは、患者さんが安心して手術後の時間を過ごせるよう、チーム医療を通じた最善の疼痛管理を提供していきます。



■ 「多角的鎮痛」を用いて ■ 術後をサポート。

術後の痛みを抑えるため、当院では静脈投与の鎮痛薬や硬膜外麻酔を組み合わせた「多角的鎮痛」を採用しています。これにより、痛みを軽減しつつ、副作用を最小限に抑えることが可能になります。

また、麻薬の使用によるふらつきや吐き気、硬膜外麻酔によるしびれなど、術後に起こる副作用や合併症の早期発見・対応にも努めています。手術後の回診では、多職種が連携し、患者さんの状態を丁寧に確認しますので患者さん側も「痛みを我慢せずに伝えること」が大切です。適切な治療のために、私たちは患者さんの声に耳を傾け、一人ひとりに最適な術後のサポートをしています。



Doctor's message



麻酔科
麻酔科指導医・専門医、
集中治療科専門医、
小児麻酔科認定医
辻 達也

患者さんに寄り添う、 術後疼痛管理の取り組み。

手術後の痛みは、適切な管理によって大きく軽減できます。私たちのチームは、患者さんが少しでも快適に回復できるよう、術後の痛みや不快症状に細かく対応することをめざしています。

痛みは、感じ方に個人差があるため、我慢せず、遠慮なく伝えてください。私たちは、患者さんの声をもとに、最適な治療を提供します。

また、術後疼痛管理は、早期回復や生活の質の向上にもつながります。手術後も安心して過ごせるよう、医療スタッフが「一丸」となってサポートしますので、不安なことがあれば遠慮なくご相談ください。



岡崎
の
Team

チーム医療を知ろう

今回のテーマ

手術看護認定看護師

手術に関わる看護のスペシャリストとして、
手術室全体の看護レベル向上に貢献しています。

手術を受ける患者さんの 不安を軽減し手術を支える。

手術看護認定看護師は、手術に関わる看護のスペシャリストとして、実践・指導・相談の三つの役割を担い、手術室全体の看護レベル向上に努めています。その一環として、当院では2024年12月に手術看護認定看護師が中心となり「術前外来」を開設し、手術への不安を軽減する取り組みを始めました。この外来では、手術の流れやリスクを詳しく説明し、患者さんが納得したうえで安心・安全に手術に臨めるようサポートしています。

加えて、術後の疼痛管理にも注力し、麻酔科医や薬剤師と連携しながら、適切な痛みのコントロールに努めています。手術前から術後まで一貫して関わることで、専門的な知識と経験を最大限に活かし、患者さんが安心・安全に手術を受けられる環境づくりに取り組んでいます。



院内外の教育活動を通じて 手術室看護の質を向上。

手術看護認定看護師は、看護の質を高めるため、院内外での教育活動にも積極的に取り組んでいます。院内では、実践指導(OJT)を通じて手術看護に携わるスタッフに、最新のエビデンスを基にした技術を伝えるほか、定期的な学習会を開催し、感染対策や麻酔管理に関する理解を深めています。また、院外では、日本手術看護学会の東海地区セミナーにおいて、新人看護師向けに手術看護の基礎を指導し、広く手術看護の質向上に貢献しています。さらに、他分野の認定看護師と連携し、がん患者や認知症患者のケアにも関わることで、より包括的な手術看護を実践。今後も、院内外での研修を通じて高度な看護スキルの普及に努め、患者さんが安心して手術を受けられる医療環境を支えていきます。



Staff's message



手術看護認定看護師
内田 勝規

術前・術中・術後を通じて支える、 患者さんの安心と安全。

手術を受ける患者さんにとって、何より大切なのは「安心して手術に臨めること」だと考えています。私たち手術室の看護師は、患者さん一人ひとりの不安や疑問に寄り添い、安全で快適な手術環境の提供に努めています。そのために、手術前の説明から、術中の安全確保、さらに術後の疼痛管理まで、多職種と連携しながら細やかなケアを実践してい

ます。加えて、手術室での看護にとどまらず、患者さんが納得したうえで治療を選択し、安心して手術に臨めるよう支援することも大切な役割です。これからも、知識と経験を活かし、患者さんの気持ちに寄り添いながら、一人でも多くの方が安心して手術を受けられる環境づくりに貢献していきたいと考えています。



プラス
a

▶運動のススメ②

軽い運動でも継続が健康への近道です。

HOSPITAL NEWS

メディカルラリーで当院の救急チームが堂々の優勝!

2025年2月15日、日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院で開催された「第13回愛知メディカルラリー」において、当院と岡崎市消防の救急チーム「おかザキングス」が見事優勝しました。本大会は、医師・看護師・救急救命士が救急救命の技術とチームワークを競う場で、各チームが複数のシナリオブースで診察や処置を実施。当院のチームは、的確な判断力と連携力で高い評価を得て、愛知県内の強豪チームを抑えての快挙を達成しました。



がん相談支援センターと認知症疾患医療センターが、売店前にリニューアルオープンしました。

がん相談支援センターには面談室を新たに設け、情報閲覧用パソコンもご利用いただけます。看護師やソーシャルワーカーが患者さんやご家族の方のがんに関する不安や疑問などをお伺いします。

認知症疾患医療センターには気軽に立ち寄れるフリースペースや相談室を設け、認知症に関するあらゆるご相談を落ち着いた環境でしていただけるようになりました。認知症疾患医療センターでは医師による認知症の外来診療、鑑別診断だけでなく、ソーシャルワーカーによる生活環境や他の身体疾患等の状況を踏まえた相談、関係機関と協力した福祉・介護の支援につなげていきます。お気軽にお立ち寄りください。



がん相談支援センター面談室



認知症疾患医療センターフリースペース

20分で聞けちゃう! 旬の健康情報

エフエムEGAO「イブニングチャージ」で当院の医療スタッフが健康情報を発信!

「いまどき旬」コーナー 18:00~18:20

令和7年
4月17日(木) 「一息ついて」
一からだもこころも整えようー
診療技術室 公認心理師 北川 三沙代

5月15日(木) ギネスブックにのった歯周病!
診療技術室 歯科衛生士 鈴木 遥花

6月19日(木) 院外処方今昔(いまむかし)
薬局 薬剤師 伊藤 暢康



エフエム
EGAO
(76.3MHz)



これまでの
放送内容は
こちらから!



岡崎市民病院
公式ホームページ



Instagram



@okazaki.hp



X (旧Twitter)



@okazaki_hp



岡崎市民病院

検索



岡崎市民病院
OKAZAKI CITY HOSPITAL

〒444-8553 岡崎市高隆寺町字五所合3番地1
TEL 0564-21-8111 <https://www.okazakihospital.jp/>

つながる
Tsu-na-ga-ru

2025
No.21 4月号

発行責任者/院長 小林 靖 発行/岡崎市民病院 広報戦略チーム
記事提供・編集協力/プロジェクトリンク事務局 発行/2025年3月